



薩摩半島（鹿児島県本土）と徳之島・与論島（奄美群島）から得られた北限更新を含むタツウミヘビの記録

是枝伶旺¹・久木田直斗²・日比野友亮³・本村浩之⁴

Author & Article Info

¹ 鹿児島大学農林水産学研究科（鹿児島市）

k4920583@kadai.jp (corresponding author)

²（霧島市）

³ 北九州市立自然史・歴史博物館（北九州市）

⁴ 鹿児島大学総合研究博物館（鹿児島市）

Received 12 August 2023

Revised 24 August 2023

Accepted 24 August 2023

Published 28 August 2023

DOI 10.34583/ichthy.35.0_28

Reo Koreeda, Naoto Kukita, Yusuke Hibino and Hiroyuki Motomura. 2023. First records of *Brachysomophis crocodilinus* (Ophichthidae) from the Satsuma Peninsula (Kagoshima mainland; northernmost record), and Tokuno-shima and Yoron-jima islands (Amami Islands), Kagoshima Prefecture, Japan. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 35: 28–34.

Abstract

Two specimens (365.8–526.2 mm total length) of a snake eel, *Brachysomophis crocodilinus* (Ophichthidae), were collected from the south coast of Satsuma Peninsula (Kagoshima mainland) and Tokuno-shima island (Amami Islands), Kagoshima Prefecture, Japan. Additionally, one specimen (304.8 mm total length) collected from Yoron-jima island (Amami Islands), Kagoshima Prefecture, on 14 June 1991 was identified here as *B. crocodilinus*. Although *B. crocodilinus* has the widest distribution in the genus, reliable records in Japanese waters have been limited, known only from Okinoerabu-jima island (Amami Islands), Sesoko-jima island (Okinawa Islands), and Iriomote-jima island (Yaeyama Islands). Thus, the presently reported specimens, described here in detail, represent the first records from the Satsuma Peninsula, and Tokuno-shima and Yoron-jima islands, the Satsuma Peninsula specimen being the northernmost record for the species.

タツウミヘビ属 *Brachysomophis* Kaup, 1856 は吻部が極めて短い、眼窩域が隆起する、口裂が大きく眼は口裂の中央部上より前方に位置する、唇部に多数のヒゲ状突起をもつ、背鰭起部が鰓孔直上よりも後方に位置する、胸鰭が小さく基部が鰓孔上部に接する、頭部感覚孔が顕著、および歯が円錐形で細長く、上顎では2列、下顎と鋤骨部では1列に並ぶことなどにより特徴付けられる (McCosker and Randall, 2001)。本属魚類はインド・太平洋に分布する7種

が知られ (McCosker and Randall, 2001)、日本からはモヨウタツウミヘビ *Brachysomophis cirrocheilos* (Bleeker, 1857)、タツウミヘビ *B. crocodilinus* (Bennett, 1833)、ハワイタツウミヘビ *B. henshawi* Jordan and Snyder, 1904、およびムラサキウミヘビ *B. porphyreus* (Temminck and Schlegel, 1846) の4種が報告されている (波戸岡, 2013; 本村, 2023)。

2020年に鹿児島県奄美群島（徳之島）、2022年に鹿児島県本土南端（南九州市沿岸）からそれぞれ1個体のタツウミヘビが採集された。さらに、1991年6月14日に与論島で採集され、鹿児島大学総合研究博物館に所蔵されていたウミヘビ科魚類の1標本がタツウミヘビに同定された。タツウミヘビはインド・太平洋の熱帯・亜熱帯域（マダガスカル近海からフレンチポリネシア）からの記録があり、本属魚類の中で最も広範囲に分布する (McCosker and Randall, 2001)。しかし、日本近海においては沖永良部島以南の琉球列島からわずかに報告されるのみであり (波戸岡, 2013; 藤原ほか, 2021)、標本を伴う同定の再現性が担保された記録はさらに絞られる。鹿児島県本土から得られた個体は本種の分布北限を更新する記録、徳之島および与論島から得られた標本は各島における本種の初記録であるため、ここに報告する。

材料と方法

計数・計測方法は Hubbs and Lagler (1964) と McCosker and Randall (2001) にしたがった。全長は必要に応じて TL と表記した。計測はノギスを用いて 0.1 mm まで行った。形態の記載は主に固定後の薩摩半島産の標本 (KAUM-I. 167255) の観察に基づき、他の観察標本が異なる形質を示した場合には標本番号と共に括弧内に記述した。計数値において左右で異なる場合には左体側 / 右体側の様に示した。形態観察には比較として藤原ほか (2021) が報告した沖永良部島産の標本 (KAUM-I. 144985) も含めた。生鮮時の体色の記載は固定前に撮影された薩摩半島および徳之島産標本のカラー写真に基づく。標本の観察には必要に応じて実体顕微鏡を用いた。標本の作製、登録、撮影、および固定方法は本村 (2009) に準拠した。本報告に用いた標



Fig. 1. Fresh specimens of *Brachysomophis crocodilinus* (A: KAUM-I. 167255, 526.2 mm TL, Satsuma Peninsula; B: KMNH VR 100467, 365.8 mm TL, Tokuno-shima island) from Kagoshima Prefecture, southern Japan.

本は鹿児島大学総合研究博物館 (KAUM) と北九州市立自然史・歴史博物館 (KMNH) に保管されており、上記の生鮮時の写真はこれらの博物館のデータベースに登録されている。

Brachysomophis crocodilinus (Bennett, 1833)

タツウミヘビ

(Figs. 1–3; Table 1)

標本 3 標本 (全長 304.8–526.2 mm)。KAUM-I. 88042, 全長 304.8 mm, 鹿児島県大島郡与論町麦屋赤崎 与論島, 水深 0.1 m, 1991 年 6 月 14 日; KAUM-I. 167255, 全長 526.2 mm, 鹿児島県南九州市顚娃町番所鼻自然公園地先, 水深 0.1 m, 2022 年 3 月 19 日, タモ網, 久木田直斗; KMNH VR 100467, 全長 365.8 mm, 鹿児島県大島郡徳之島町ヨナマビーチ 徳之島, 2020 年 5 月 8 日, 徒手 (砂浜への打ち上げ), 益子正和。

記載 計数計測値は Table 1 に示した。体はわずかに側扁した円筒形で細長い。肛門は体の中央よりわずかに後方に位置する。体背縁と体腹縁は頭部以降では概ね直線的。尾部は後方にむかい次第に体高が小さくなるとともに、軀

幹部よりもわずかに強く側扁する。尾端部は固い肉質で尖る。尾端部の背中線と腹中線上には肉質の隆起線をもち、背側のものは腹側のものより大きい。

頭部はやや大きい。その背面は吻端から眼にかけて体軸に対して 45 度ほどの角度で上昇したのち、鰓嚢部の中央付近まで緩やかに上昇し続ける。腹面は下顎先端部から緩やかに鰓嚢中央部付近まで下降したのち、鰓孔直下まで上昇する。眼は頭部の前部に位置し、口裂の前部 1/5 付近に位置する。眼は小さく、やや突出し、頭部を側面から見て眼の上部 1/3 ほどが頭部の輪郭から突出する。頭部背面には前鼻孔のやや前方から眼のやや後方にかけて頭部背面を囲う様に連続する低い隆起線があり、前端部から眼後縁付近にかけては概ね直線的だが、眼後縁より後方では幅広い (Fig. 2)。この隆起線の内側は大部分が平坦だが、前鼻孔の直上付近には横方向の低い隆起があり、頭部背面の凹部は 2 分される。眼の後方へ続く隆起線の後縁はなだらかに低くなり、明瞭な欠刻とならない。口裂は端位で大きく、その後端は頭部の前方 1/3 ほどに達する。下顎は上顎よりわずかに突出する。上唇と下唇は縁辺が著しく波打つ楕円形で扁平なヒダ状の突起物を多数もつ (KAUM-I. 144985 ではやや細く短い)。前鼻孔の開口部は先端が波打ち、前

下方へ向かう管状の短い皮弁をもち、基部は吻端と眼の間付近に位置する。後鼻孔は下方へ向かい、前鼻孔よりもやや長い管状の皮弁をもち、前鼻孔の管状皮弁の基部と眼の前縁の間付近に位置する。鰓孔は狭く、鰓孔前縁は前方に湾入する。鰓孔上端は吻端よりわずかに下方かつ、下端よりわずかに前方に位置する。

背鰭は低く、最前部の第6鰭条にかけて高くなったのち (KMNH VR 100467 では第7軟条にかけて)、尾部の中央付近より後方は次第に低くなる。背鰭起部は胸鰭後端から後方に頭長の1/4ほど (KMNH VR 100467 では1/3) に位置する。背鰭基底の後端部は、尾端部背縁の肉質の隆起線に連続する。臀鰭は背鰭よりやや低く、最前部の第7鰭条にかけて高くなったのち (KMNH VR 100467 では8)、後方に向かい緩やかに低くなるが、尾部の中央付近でやや低くなる部分がある。臀鰭起部は肛門の直後に位置する。胸鰭は概ね円形で極めて小さく、胸鰭は眼径の3.1倍 (KAUM-I. 144985 では2.6倍; KMNH VR 100467 では2.6倍; KAUM-I. 88042 では2.0倍)。胸鰭基底の上端は鰓孔

上端と連続し、下端は鰓孔中央よりやや上方に位置する。

側線系 頭部から尾部にかけて側線系が発達する。頭部付近の感覚管の開口部を Fig. 2 に図示した。眼上感覚管孔 (SO) は1 + 3個 (KAUM-I. 144985 では1 + 2)、眼下感覚管孔 (IO) は4 + 3個、下顎感覚管孔 (M) は5–6個 (KAUM-I. 144985 では6–7)、前鰓蓋感覚管孔 (PO) は2個、上側頭感覚管孔 (ST) は1 + 1個。側線感覚孔はそれぞれおおそ等間隔で並び、肛門前より前方における開孔数は60個 (KAUM-I. 144985 では64; KMNH VR 100467 では60/61; KAUM-I. 88042 では61)。上述の感覚管の開孔部は黒から黒褐色に縁取られることで比較的明瞭だが、眼上感覚管孔は縁取りが不明瞭かつ、感覚孔が他のものより小さく、実体顕微鏡下での観察を要する。眼の後方から上側頭感覚管孔の間には多数の微細な感覚孔が分布する。

歯 歯は長く鋭い円錐歯でわずかに後方へ湾曲する。主上顎骨歯は2列で、外側歯は内側歯の半分ほどの太さかつ半分から2/3ほどの長さ (KAUM-I. 144985 ではほぼ2列だが内側歯列後端と外側歯列との間に1–2歯があり、部

Table 1. Count and measurements of *Brachysomophis crocodilinus* in this study and McCosker and Randall (2001). Values of neotype are shown in parentheses.

	This study				McCosker and Randall (2001)
	Kyushu	Amami Is.			
	Satsuma Pen.	Yoron I.	Tokunoshima I.	Okinoerabu I.	
	KAUM-I. 167255	KAUM-I. 88042	KMNH VR 100467	KAUM-I. 144985	
Total length (mm)	526.2	304.8	365.8	544.9	197–817 (544)
Counts					
Lateral line pores before anus	60/60	61/61	60/61	64/64	—
Infraorbital pores	4 + 3/4 + 3	4 + 3/4 + 3	4 + 3/4 + 3	4 + 3/4 + 3	4 + 3
Mandibular pores	5/6	6/6	5/6	6/7	6
Preopercular pores	2/2	2/2	2/2	2/2	2
Supraorbital pores	1 + 3/1 + 3	1 + 2/1 + 2	1 + 2/1 + 2	1 + 2/1 + 2	1 + 2
Supratemporal pores	2/2	2/2	2/2	2/2	—
Measurements %TL					
Head length (HL)	13.4	14.8	14.4	14.6	13.7–15.4 (14.9)
Trunk length	39.1	38.4	39.9	41.3	(39.3)
Snout length	0.9	1.1	1.0	0.9	(0.9)
Eye diameter	0.4	0.6	0.5	0.6	(0.7)
Upper-jaw length	4.4	4.8	5.1	5.1	(4.9)
Height of gill slit	1.6	1.5	1.2	1.9	(2.4)
Body depth at gill opening	4.2	3.7	3.3	4.8	4.0–6.1 (5.1)
Body width at gill opening	3.8	3.0	3.7	4.0	(4.4)
Body depth at anus	3.8	2.5	3.4	4.6	(4.8)
Body width at anus	3.8	3.0	3.4	3.4	(4.4)
Head and trunk length	53.0	53.1	53.9	55.1	53.2–55.9 (—)
Tail length	46.7	46.4	45.4	44.3	44.1–46.8 (45.8)
Pre-anus length	52.3	53.7	54.2	55.4	—
Pre-dorsal-fin length	18.5	19.9	18.6	20.3	17.5–26.1 (20.2)
Pre-anal-fin length	54.9	54.6	55.5	56.6	—
Pectoral-fin length	1.4	1.3	1.3	1.6	(1.5)
Pectoral-fin base length	1.4	1.0	0.8	1.6	—
Measurements %HL					
Snout length	6.7	7.3	6.8	6.1	5.4–7.7 (6.2)
Eye diameter	3.3	4.2	3.6	4.2	3.8–6.8 (4.7)
Upper-jaw length	32.4	32.4	35.7	34.8	31.0–40.3 (33.2)
Pectoral-fin length	10.3	8.7	9.3	11.0	6.9–11.1 (10.0)

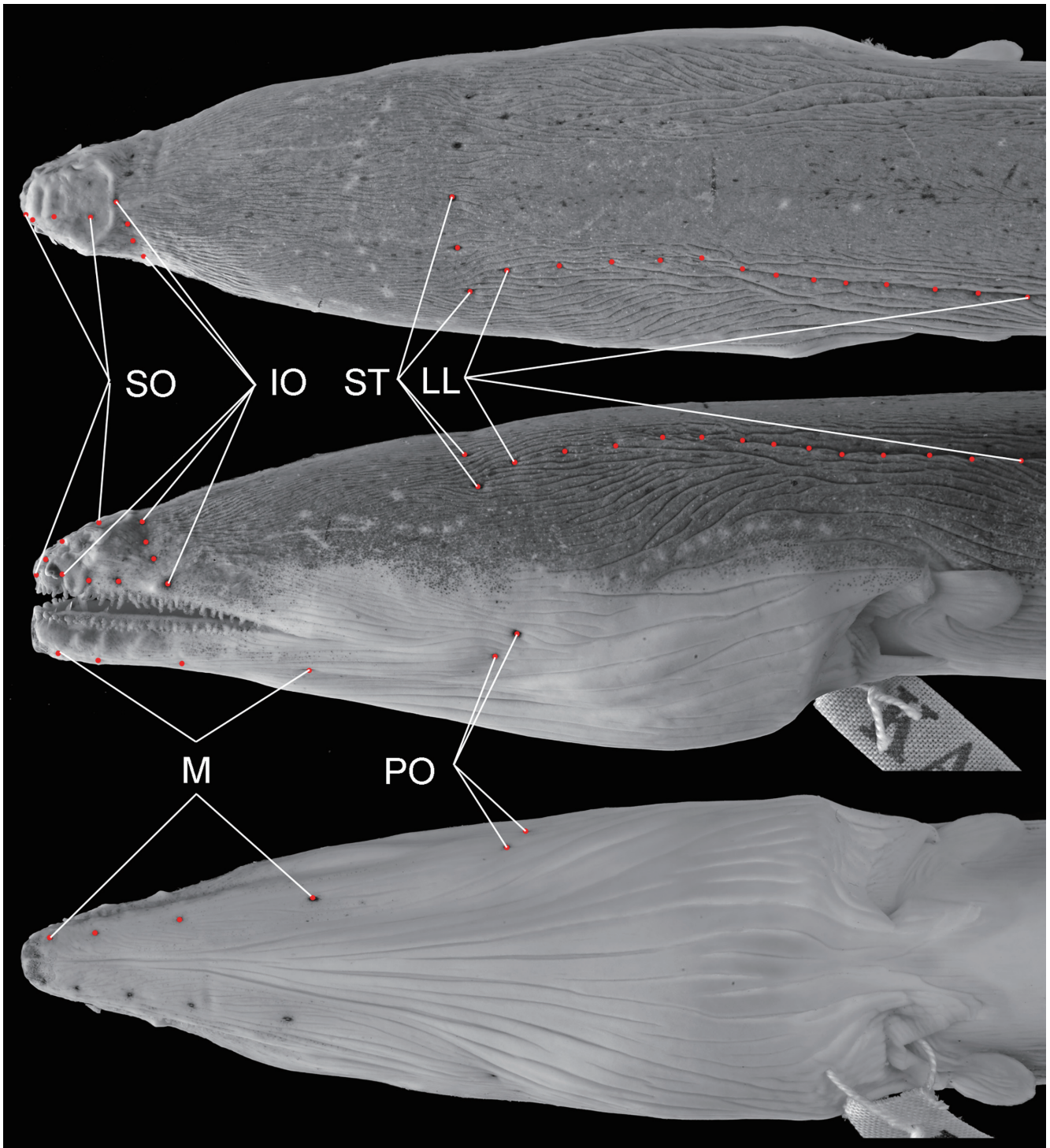


Fig. 2. Dorsal, lateral, and ventral views of head of *Brachysomophis crocodilinus* (KAUM-I. 167255, 526.2 mm TL), showing the distribution of lateral-line system. Red circles indicate sensory pores. IO: infraorbital pores; M: mandibular pores; PO: preopercular pores; SO: supraorbital pores; ST: supratemporal pores; LL: lateral-line pores.

分的に3–4列)。外側歯は18–19歯で眼の後縁直下付近から口裂後端の範囲に分布し、互いの基部は概ね隣接し、歯は後方に向いて倒れており、後方の歯ほど角度が大きくなると共に皮下に埋没し、最後方付近の歯は先端部のみが露出する (KAUM-I. 144985では29–30で、2歯が隣接し、歯1つ分の間隔を空けて連続する; KMNH VR 100467では18–22で、後方に向かうほど歯はわずかに小さくなり、皮下に埋没していく; KAUM-I. 88042では17–27で、右側外列歯は後方で極めて小さくなり過密に並ぶ)。主上顎

骨の内側の歯は8–10歯であり、眼の後縁の直下よりわずかに後方から最後方の下顎感覚管の開開口部よりわずかに前方の範囲に1列あり、互いにほぼ同大の歯の基部はほぼ隣接するが、前方ではやや間隔が広い (KAUM-I. 144985では12歯; KMNH VR 100467では9歯; KAUM-I. 88042では11–12歯)。前上顎骨には左右に2歯あり (KMNH VR 100467では1歯)、中央部かつ後鼻孔の直下付近に主上顎骨歯よりわずかに太く、1.5倍ほどの長さの1歯がある (KAUM-I. 144985は最先端にさらにもう1歯をもつ)。鋤

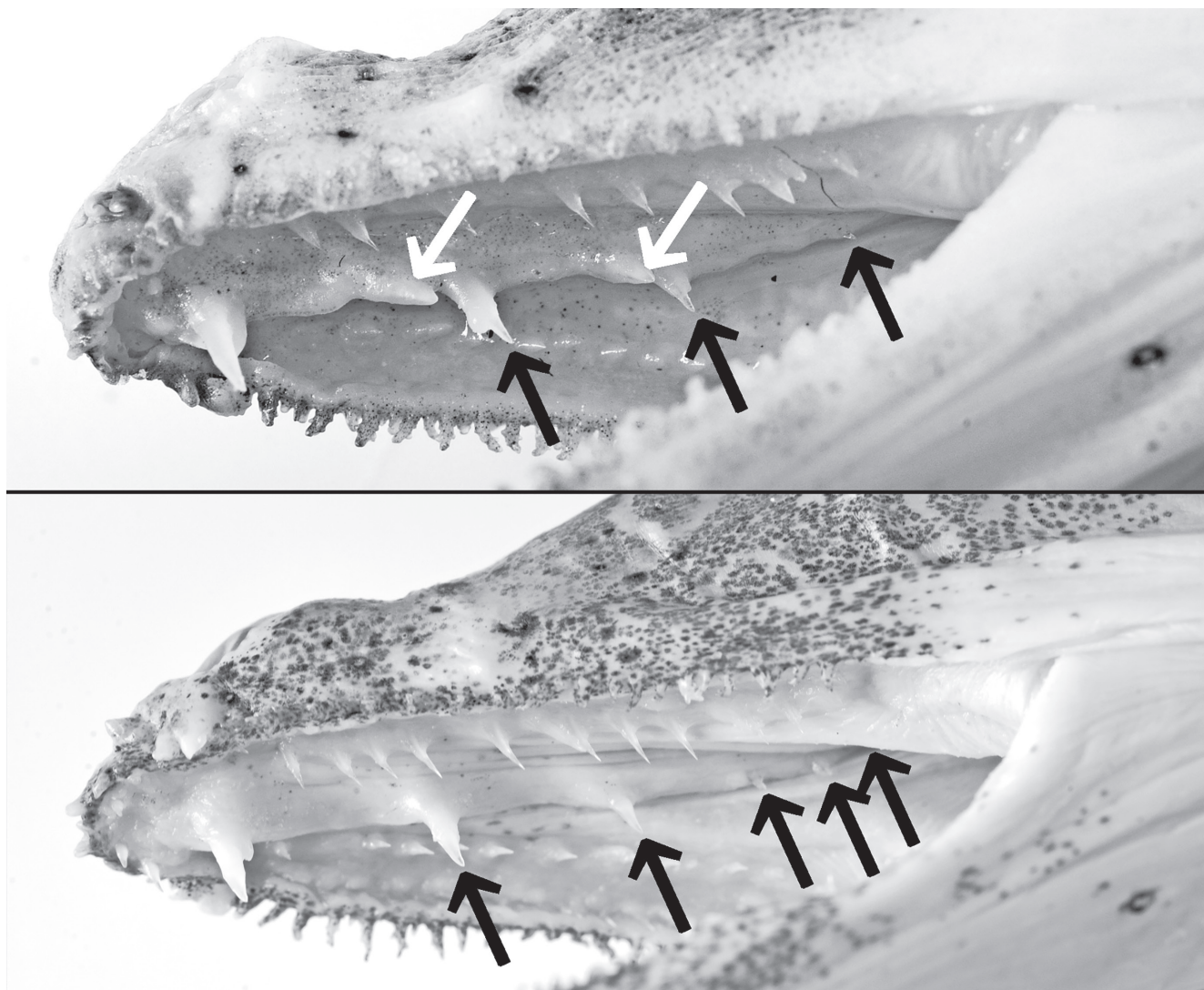


Fig. 3. Inner view of upper jaw of *Brachysomophis crocodilinus* (KAUM-I. 167255, 526.2 mm TL), showing the vomerine teeth. White and black arrows indicate teeth directed posteroventrally and vertically, respectively.

骨には5歯あり、前方のものほど大きく、眼の後縁の直下付近、口裂の中央付近、最後方の眼下感覚管孔の直下付近およびそのやや後方に位置し、眼の後縁の直下付近と眼下感覚管孔の直下よりやや後方に位置する鋤骨歯は後方に向いて倒れている一方、口裂の中央付近と最後方の眼下感覚管孔の直下付近に位置する鋤骨歯はほぼ直角（KAUM-I. 144985では5歯であり、KAUM-I. 167255における前から2、4番目に相当する位置と、その更に後方に小さな2歯がある；KMNH VR 100467では9歯あり、前方の3本は大きく間隔を空けて並び、4番目の歯は後方に向いて倒れる。5番以降の歯はやや細く、前方よりも密に並ぶ；KAUM-I. 88042では6歯あり、ほぼ等間隔で間隔を空けて並ぶ）。下顎歯は9歯でほぼ垂直に生え、前鼻孔の直下よりわずかに前方（左のみ）、前鼻孔の直下付近、後鼻孔の直下付近、真ん中の鋤骨歯よりやや前方と、最後方の眼下感覚管孔の直下よりやや後方に5–6歯あり、先端から2–3番目の歯が最も大きく、主上顎骨の内側の歯よりやや大きい程度であり、それ以外の歯はその半分から2/3ほど

の太さと長さ。最後方の眼下感覚管孔の直下よりやや後方の下顎歯は体軸に対して後方に45度以上で大きく傾いており、それより前方の歯はほぼ直角（KAUM-I. 144985では右側に11本、左側に15本の歯があり、歯列後方の歯数が多く、右体側では眼の直下と最後方の眼下感覚管開孔の直下付近にほぼ後ろ向きに倒れた2歯がある；KMNH VR 100467では右側に12本、左側に10本の歯がある、前者では前端の2本と後端の4本が、後者では前端の1本と後端の3本が小さく、他の歯の約半分の大きさ；KAUM-I. 88042では左右ともに10本あり、いずれも前端の2本と後端の3本が小さく、他の歯の2/3程度。歯は全体にまんべんなく分布せず、前端の数本と後端の数本が密に並び、中間部では疎に並ぶ）。

色彩 生鮮時（Fig. 1）— 体背面は灰褐色で腹側ほど淡く、かつ黄色がかかる（KAUM-I. 144985とKMNH VR 100467では体背面に瞳孔以下の直径の黒斑が散在する；藤原ほか、2020 参照）。口裂付近と尾端部は淡い灰褐色から黄褐色。体腹面はわずかに黄色がかった白。虹彩は光沢

のある金色、瞳は青色がかった黒を呈する。感覚管孔はすべて外縁が黒く縁取られる (KMNH VR 100467 では前鰓蓋感覚管孔の一部で縁取りを欠く)。背鰭と臀鰭は白色半透明で、基部付近にはわずかに体背面と同色の灰褐色の不明瞭な小斑が散在する (KMNH VR 100467 ではない)。胸鰭は白色半透明。

固定後 — 体は淡い黄を呈し、体背面はやや暗化する (KAUM-I. 144985 と KMNH VR 100467 の小黑斑は残る)。

分布 タツウミヘビはマダガスカル近海からフレンチポリネシア (タヒチ)・琉球列島 (沖永良部島) にかけてのハワイを除くインド・太平洋の熱帯・亜熱帯域に広く分布する (McCosker and Randall, 2001; 波戸岡, 2013)。日本国内においては沖永良部島 (奄美群島)、瀬底島 (沖縄諸島)、および西表島 (八重山諸島) から記録されており (Yoshino and Nishijima, 1981; 岸本・佐々木, 1982; 浅野, 2000; McCosker and Randall, 2001; 波戸岡, 2013; 藤原ほか, 2021)、沖永良部島からの記録が本種の分布北限とされていた。本研究により鹿児島県本土の薩摩半島南岸と、奄美群島の徳之島および与論島からも本種が記録された。

同定と形態変異 本研究で観察を行った標本は、眼の突出はやや小さく、眼の後方に明瞭な欠刻をもたない、背鰭起部が胸鰭後端よりはるかに後方に位置する、全長に対する頭長と尾長がそれぞれ 13.4–14.8% と 44.3–46.7%、頭長に対する吻長と胸鰭長がそれぞれ 6.1–7.3% と 8.7–11.0%、および明瞭で大きな斑紋をもたないことが McCosker and Randall (2001) と波戸岡 (2013) の示したタツウミヘビ *Brachysomophis crocodilinus* の標徴に一致し、本種に同定された。

KAUM-I. 144985 は下顎感覚管孔数が 6–7 とやや多く、主上顎骨歯が部分的に 3–4 列となることにおいて、KAUM-I. 167255 は全長に対する頭長の比率が 13.4%、肛門前長が 53% とわずかに小さい、眼上感覚管孔 (SO) が 1 + 3 とやや多い、下顎感覚管孔数が 5–6 とやや少ないことにおいて、KAUM-I. 88042 では全長に対する肛門前長が 53.1% とわずかに小さい、体高が 3.7% とやや小さいことにおいて、KMNH VR 100467 では頭長に対する眼径が 3.6% とやや小さい、全長に対する体高が 3.3% とやや小さい、下顎感覚管孔数が 5–6 とやや少ないことで McCosker and Randall (2001) の示した *B. crocodilinus* の特徴とは差異がみられた。頭長、肛門前長、眼径、および体高の差異は 1 ポイント未満の小さなものであることから、本研究においてはこれらを種内変異とみなした。下顎感覚管孔でみられた差異は、同一個体においても左右で異なる値をとることや、頭部の感覚管孔としては他のウミヘビ科魚類においても幅のある種内変異が頻繁に観察される部位であることから、種内変異とみなした。KAUM-I. 167255 の眼上感覚管孔は眼の直前の感覚孔が 1 つ多かったが、その他の形質

で顕著に異なることはないため、種内変異とみなした。

KAUM-I. 144985 の主上顎骨歯は後部で部分的に 3 列以上であり、2 列とした McCosker and Randall (2001) とは異なるが、この歯は極めて小さく、大部分は皮下に埋没していたため、発見が困難または固定状態によって観察が困難な可能性がある。また、本研究において観察したタツウミヘビは、両顎の歯の数、大きさ、間隔に差異がみられ、一部の個体では鋤骨歯の生え方において、McCosker and Randall (2001) の記載とはやや異なる状態が観察された。KAUM-I. 167255 は、鋤骨後部の歯が未発達で観察されなかったが、前部ではむしろ多く、ほぼ垂直に生える鋤骨歯の前方に、垂直の歯とほぼ同大で大きく後方へ倒れた 2 歯がみられた (Fig. 3A)。KMNH VR 100467 においても、前から 4 番目の歯が後方に倒れている状態が観察された。McCosker and Randall (2001) ではこの後方へ倒れた歯の存在が記述されていないが、タツウミヘビ同様に後方へ倒れた鋤骨歯はムラサキウミヘビ (KAUM-I. 166482, 全長 1132 mm) においても、前方から第 3, 5 番目の鋤骨歯が後方を向いてほぼ倒れている状態が観察された。したがって、タツウミヘビ属においては後方に大きく傾いた状態の鋤骨歯をもつ個体が少なくない割合で出現し、鋤骨歯の角度には個体間の変異が大きい可能性がある。タツウミヘビにおいては鋤骨歯以外の歯において、左右非対称な生え方をする個体が多く観察されたことから、歯列の状態には個体間の変異が大きいと考えられる。やや細長い歯をもつタツウミヘビ属においては捕食時などに歯の欠損が起こる可能性が十分に考えられ、これらの欠損した部位の再生過程において、上述したような不統一な歯列 (歯の角度を含む) が形成されるのかもしれない。

備考 薩摩半島産の標本は夜間にタイドプールの外縁部 (砂地で水深は 50 cm ほど) において、波しぶきを立てながら遊泳していたところを第 2 著者により発見、採集された。タツウミヘビに関する生態的な知見は少ないが、小石やサンゴ礫混じりの軟らかい砂地を好み (McCosker and Randall, 2001)、頭部のみを砂中から出した様子が複数報告されている (例えば、McCosker and Randall, 2001; 藤原ほか, 2021)。上述の遊泳行動は平時の行動とは考えにくく、恐らく砂地に潜行していた個体が人影に反応して底砂から抜け出したものと考えられる。徳之島産の標本は生きたまま打ち上がったところを採集されたもので、どのような経緯で打ち上げに至ったかは不明である。

タツウミヘビの分布記録は分布の項に記述した通りであるが、上述した記録のほかに Günther (1870: 64) が本種 (*Ophichthys crocoulinus* として) の産地に Japan を含めたものがある。Jordan and Snyder (1901: 875) はこの記録を疑問視しながらも日本に出現するウナギ型魚類として本種を取り扱ったが、後に Jordan et al. (1913) では “*crocoulinus*”

を種小名にもつ種は含まれておらず、代わりにタツウミヘビ属唯一の種として *Brachysomophis rostellatus* がタツウナギ (*Tastu-unagi*) の和名と共に掲載されている (Jordan et al., 1913: 88). その後、田中 (1921: 224) によって *Brachysomophis crocodilinus* がタツウミヘビとして扱われ、以降この和名と学名が対応するものとして扱われている (岡田, 松原, 1938; 松原, 1955; Yoshino and Nishijima, 1981; 岸本・佐々木, 1982; 浅野, 2000; 波戸岡, 2013; 藤原ほか, 2021). 波戸岡 (2013) は田中 (1921) の著者である田中茂穂博士が、上述の Jordan et al. (1913) の原稿を作成していることから、何らかの理由でタツウナギという和名がタツウミヘビへと変化し、*B. rostellatus* から *B. crocodilinus* に再同定されたと推測している (田中は同様の変更をウツボ科や他のウミヘビ科の種に対しても行っている). 田中 (1921) 以降、タツウミヘビの日本国内における分布を保証する記録は低水温により沖縄県瀬底島に漂着した 1 個体を報告した Yoshino and Nishijima (1981) までなく、それ以前の記録はすべて疑問視される Günther (1870) に基づくと考えられる. Günther (1870) の記録は Jordan and Snyder (1901) において疑問視されているのみでなく、産地も Japan と漠然としているため、上述の本種の記録には含めなかった. したがって、従来本種の知られていた分布北限は沖永良部島であり、同島以北における確かな記録は存在しないため、本研究で記載した標本が九州、徳之島、および与論島における初記録であるとともに、薩摩半島産の標本は本種の分布北限記録となる.

比較標本 タツウミヘビ: KAUM-I. 144985, 全長 544.9 mm, 鹿児島県大島郡知名町田皆沖泊港 沖永良部島, 水深 2–4 m, 2020 年 7 月 30 日, タモ網, Kunto Wibowo.

謝 辞

鹿児島大学総合研究博物館のボランティアと同魚類分類学研究室の学生のみなさまには標本の作製および登録作業において協力をいただき、古橋龍星氏には採集調査にご協力いただいた. 近畿大学の宮崎佑介氏と天城町の益子正和氏には標本の入手に助力いただいた. Ichthy 担当編集委員の畑 晴陵氏と匿名の査読者には原稿に対して適切な助言をいただいた. 以上の方々に謹んで感謝の意を表する. 本研究は鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島・琉球列島

の魚類多様性調査プロジェクト」の一環として行われた. 本研究の一部は公益財団法人日本海科学振興財団「海の学びミュージアムサポート」, JSPS 科研費 (20H03311・21H03651・20K15593), JSPS 研究拠点形成事業—B アジア・アフリカ学術基盤形成型 (CREPSUM JPJSCCB20200009), および文部科学省機能強化費「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点形成」の援助を受けた.

引用文献

- 浅野博利. 2000. タツウミヘビ, p. 83. 岡村 収・尼岡邦夫 (編) 山溪カラー名鑑 日本の海水魚. 山と溪谷社, 東京.
- 藤原恭司・上原航知・松岡 翠・Kunto Wibowo・本村浩之. 2021. 琉球列島と奄美群島初記録種を含む沖永良部島初記録の魚類 50 種. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 3: 30–40. [URL](#)
- Günther, A. 1870. Catalogue of the fishes in the British Museum. Vol. 8. Catalogue of the Physostomi, containing the families Gymnotidae, Symbranchidae, Muraenidae, Pegasidae, and of the Lophobranchii, Plectognathi, Dipnoi, Ganoidei, Chondropterygii, Cyclostomata, Leptocardii, in the collection of the British Museum. Taylor & Francis, London. xxv + 549 pp. [URL](#)
- 波戸岡清峰. 2013. ウミヘビ科 Ophichthidae, pp. 266–277, 1794–1802. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第 3 版. 東海大学出版会, 秦野.
- Hubbs, C. L. and Lagler, K. F. 1964. Fishes of the Great Lakes region. University of Michigan Press, Ann Arbor. xv + 213 pp., 44 pls.
- Jordan, D. S. and J. O. Snyder. 1901. A review of the apodal fishes or eels of Japan, with descriptions of nineteen new species. *Proceedings of the United States National Museum*, 23: 837–890. [URL](#)
- Jordan, D. S., S. Tanaka and J. O. Snyder. 1913. A catalogue of the fishes of Japan. *Journal of the College of Science, Tokyo Imperial University*, 33: 1–497. [URL](#)
- 岸本浩和・佐々木邦夫. 1982. 西表島 (琉球列島) 産魚類 II. 板鰐類およびウナギ目魚類. 東海大学海洋研究所研究報告, 4: 15–48.
- 松原喜代松. 1955. 魚類の形態と検索. Part I. 石崎書店, 東京. xi + 789 pp.
- McCosker, J. E. and J. E. Randall. 2001. Revision of the snake-eel genus *Brachysomophis* (Anguilliformes: Ophichthidae) with description of two new species and comment on the species of *Mystriophis*. *Indo-Pacific Fishes*, 33: 1–32.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp. [URL](#)
- 本村浩之. 2023. 日本産魚類全種目録. これまでに記録された日本産魚類全種の現在の標準和名と学名. Online ver. 20. [URL](#) (20 July 2023)
- 岡田彌一郎・松原喜代松. 1938. 日本産魚類検索. 三省堂, 東京. xl + 584 pp., 113 pls.
- 田中茂穂. 1921. 日本魚学. 上巻. 裳華房, 東京. 482 pp. [URL](#)
- Yoshino, T. and S. Nishijima. 1981. A list of fishes found around Sesoko Island, Okinawa. University of the Ryukyus Sesoko Marine Science Laboratory Technical Report, 8: 19–87, pls. 1–3.